

集団同一視の経時変化と内集団成員イメージの評価¹⁾

赤 須 大 典²⁾
木 藤 恒 夫³⁾

要 約

本研究では、集団に属する期間の長さ(学年)が集団成員の所属集団に対する集団同一視の程度や集団成員イメージ評価に及ぼす影響を調べた。心理学科1年生から3年生の大学生132名(1年生56名, 2年生49名, 3年生27名)を対象にしてKarasawa(1991)の集団同一視尺度を用いて所属集団である心理学科に対する同一視の程度を測定し, また心理学科の成員として好ましい(好ましくない)集団成員イメージ評価を行った。集団同一視尺度への因子分析の結果, 3つの因子: 集団そのものへの愛着, 集団成員への愛着, グループ成員としての自覚が抽出された。所属期間の長さが心理学科への同一視に与える影響を検証したところ, 「集団そのものへの愛着」を示す下位因子において, 2年生の同一視が最も強かった。集団成員イメージ評価については, 好ましい成員に対して2年生が3年生よりも高い評価を下していた。さらに集団同一視と集団成員評価との間の相関を測ったところ, 集団同一視尺度の集団そのものへの愛着の因子とグループ成員としての自覚の因子の2因子で, 好ましい成員イメージ評価との間の有意な相関が見られた。

キーワード: 集団同一視, 成員イメージ評価, 所属期間

問 題

個人は集団に所属することで社会的アイデンティティを獲得する。社会的アイデンティティは, 個人が自分自身を集団の成員として意識することによって生じる自己概念であり, 集団間行動の説明や他成員の評価をする際の中心概念となる(Tajfel & Turner, 1979)。ただし, 集団の性質や内容にともない獲得する社会的アイデンティティが異なるため, 社会的アイデンティティの質的あるいは量的な測定を直接的に行うことは難しいといわれている(Hogg, 1992)。Tajfel & Turner(1979)は, 個人が社会的アイデンティティを獲得するためには, 自らを所属する集団の典型的な成員と同一視する必要があると述べている。そのため

Hinkle, Taylor, Fox-Cardamone, & Cook(1989)は社会的アイデンティティに含まれる集団に対する愛着などを測定する尺度を作成した。さらに, Karasawa(1991)は集団成員が自らを所属集団の一員として同一視させるプロセスに着目して, 集団への同一視の程度を測定する集団同一視尺度を作成した。この集団同一視尺度によって, 社会的アイデンティティにおける, 集団成員の所属集団へのコミットメントの程度を測定することが可能となる。

本研究で着目する点は, 集団に所属する期間の長さが集団同一視の強さに及ぼす影響である。最小条件集団の実験から, 集団に所属するだけでも個人は自らを所属集団の成員として意識するようになることが知られている(Tajfel, Billig, Bundy, & Flament, 1971)

1) 本論文で用いたデータは, 赤須大典の久留米大学心理学研究科修士論文(2003年度)の作成のために収集したものである。

2) 久留米大学大学院心理学研究科

3) 久留米大学文学部心理学科

が、集団に所属して時間が経過すると、成員としての意識はどのように変化するのであろうか。垂澤・広瀬(2006)は、集団成員の流動性が成員の内集団共同行為や社会的アイデンティティへの影響を実験的に検討している期間中、3回にわたって所属集団に対する愛着や自尊心を測定する簡単な質問紙調査を実施し、実験の経過に伴って所属集団への愛着や自尊心が強まるという知見を得ている。長い期間同じ集団に所属することで、集団の目的に沿った行動を多く行うことになり、集団内のほかの成員との相互作用も増加する。集団に長く所属している成員は、そうでない成員よりも所属集団に対してより強くコミットメントすることが考えられ、集団に対する同一視は集団に所属する期間が長くなるにつれて強まると予想される。そのことから本研究では所属期間の長さを基準として、所属期間の経過による集団同一視の変化を測定し、分析する。

Karasawa (1991) の集団同一視尺度には2つの下位因子が含まれている。所属集団そのものに対する感情的・価値的な同一視を測る質問群から成るIDgroup 因子と、所属集団の他の成員に対する感情を測る質問群で構成されるIDmember 因子である。IDgroup 因子については、所属した集団をよく知ることによって所属集団への愛着が増し、責任ある立場に立たされるなどの出来事を経験することで成員としての自覚が強まることがあるだろう。集団で行われる活動への興味・関心は、集団への愛着や関心と関連する部分も多い。したがって集団での活動のある程度の時間継続して行うことで、IDgroup 因子の程度は所属時間の経過にともなって高まっていくであろう。またIDmember 因子に関しては単純接触効果 (Zajonc, 1968) から、集団成員に対してより多く接することで、成員へのより好ましい感情が導かれる。成員間の相互作用は所属期間の長さにもなって増えていくと考えられる。そのため所属期間が長くなることでIDmember 因子の得点もIDgroup 因子の場合同様、高まっていくことが予想される。

また所属集団の他の成員との関わりについては、集団同一視尺度のIDmember 因子で測定されているような相互作用を持つ他の所属集団の成員への愛着だけではない。直接的な相互作用はないものの、集団の特徴や雰囲気を作っている没個人化した成員のイメージへの評価もあることが考えられる (Turner et al, 1987)。そこで、本研究では集団同一視に対するものと同じく、所属期間が長くなることで集団成員のプロトタイプの評価としての集団成員評価も変化していく

のでないか。

Marques, Yzerbyt & Leyens (1988) が行った黒い羊効果の研究で、成員への評価は所属集団の評価と繋がることが示されている。そのため集団において成員評価の土台となるであろう成員イメージへの評価も所属集団への意識に関連があると考えられる。また黒い羊効果 (Marques, Yzerbyt & Leyens, 1988) に関連する大石・吉田 (2001, 2002) の研究では、集団同一視の強さが所属集団の成員に対する評価に影響を及ぼすことを明らかにしている。所属集団に対する集団同一視が高い成員は低い成員にくらべて、好ましい内集団成員への評価をより高くし、逆に好ましくない成員に対する評価はより低くする。そのことから集団同一視の程度に影響を与える要因は、集団成員に対する態度にも同様の影響を与えると考えられる。

本研究では2つの質問紙を用いて、1) 集団への所属期間の長さが集団同一視の強さに及ぼす影響、2) 所属期間の長さが所属集団で行われる活動に対する興味や関心に及ぼす影響、3) 集団への所属期間の長さが所属集団の好ましい (あるいは、好ましくない) 成員のイメージに対する評価へ及ぼす影響、および、4) 集団同一視の強さと成員のイメージに対する評価との関連性の4つの問題を検討する。

本研究では、調査対象者は心理学部の学部学生であることから、学年の進級を所属期間の経過と捉え、学年が進むにつれて集団同一視、集団活動への興味・関心、また集団成員イメージへの評価がどのように変化するかを検討する。

質問紙1では、Karasawa (1991) の集団同一視尺度 (12項目版) を用いて成員の持つ集団同一視の強さを測定する。集団同一視の比較的長期の所属期間における変化を見るため、今回の研究では大学文学部心理学部の1年生から3年生を調査対象者とし、学年の違いによって集団同一視がどのように変化するかを検討する。集団同一視に含まれる下位概念のそれぞれについても、所属期間の長さがそれぞれどのように影響を与えているかを調査する。また心理学における活動である、心理学という学問に対する興味や関心が学年の違いによって変化するかも検討する。垂澤・広瀬 (2006) の知見から、集団に所属する年数が長くなればなるほど集団同一視の程度が高まるという仮説を立てた。また、心理学への興味・関心についても同様に、集団に所属する年数が長くなると強くなるという仮説を立てた。

質問紙2では調査対象者に集団成員として好ましい

成員と好ましくない成員のイメージを特性形容詞にどの程度あてはまるかを評価させた。その評価結果が学年の違い、すなわち所属期間の違いによってどのように変化するかという、成員評価への所属期間の長さの影響を検討する。

また、尺度によって測定される集団同一視の強さと、心理学への興味・関心、成員イメージとの間にどのように相関が見出されるかを検討することで、それぞれ関連を調べる。

方 法

調査対象者 K 大学文学部心理学科に所属する1年生から3年生までの大学生132名。1年生が56名(男子19名, 女子37名), 2年生が49名(男子12名, 女子37名), 3年生が27名(男子5名, 女子22名)。

調査手続きと質問紙 2003年の10月下旬から11月上旬にかけて調査を実施した。1年生と2年生の全調査対象者, および3年生の調査対象者の半数については講義時間を利用して調査用紙を配布し, 回答をさせた。3年生の調査対象者のうち残りの半数については, 各対象者のゼミの時間に質問紙を配布し, 調査対象者各人で個人的に回答を行わせた後に提出させた。

質問紙1では Karasawa (1991) の集団同一視尺度日本語版の12項目を用いて, 調査対象者の所属集団である心理学科に対する集団同一視を7件法で回答させた。なお集団同一視尺度における所属集団の部分は心理学科と表記して調査を行った。

集団同一視尺度12項目に続いて, 心理学という学問に対して各調査対象者がどの程度強く興味や関心を持っているかなどを測定するための5項目の質問(7件法)にも回答させた。この5項目は調査者のオリジナルの項目である。具体的な質問内容は, 「あなたは自分がどのくらい心理学に熱心だと思いますか?」, 「あなたは心理学を面白いと感じますか?」, 「あなたの心理学への興味は弱いほうだと思いますか, 強いほうだと思いますか?」, 「あなたは心理学の勉強に苦痛を感じますか?」(逆転項目), 「あなたは心理学を将来役に立てたいと思いますか?」となっている。本研究ではこの5項目の質問を一群の心理学興味因子として扱っている。

質問紙2では調査対象者に, 彼らが所属している心理学科における, 好ましい成員としての学生イメージと, 好ましくない成員としての学生イメージとをそれぞれ思い浮かべさせ, 調査者が選定した性格特性に関連する21個の形容詞がその成員イメージにどの程度あてはまるかを, 1(全くあてはまらない), から7(非常に良くあてはまる)までの7件法で評価させた。

質問紙1と質問紙2はひとまとめにされ, 一連のものとして実施された。

結 果

集団同一視尺度の因子分析

所属期間の長さが集団同一性に影響を与えるかどうかを検討するのに先立って, 調査対象者が所属集団に

表1 集団同一視の因子分析(最尤法/プロマックス回転)。

項目内容	集団愛着因子	メンバー愛着因子	自己意識因子
あなたは心理学科にどのくらい愛着を感じていますか?	.90	.08	-.17
あなたは心理学科にプライドを感じますか?	.78	-.15	.10
あなたの心理学科に対する所属意識は強いほうですか, 弱いほうですか	.61	.08	.13
あなたは自己紹介するときや会話の中などで, 自分が心理学科に属していることに, よくふれる方ですか, ふれない方ですか	.40	-.04	.09
あなたは, ほかの心理学科のメンバーが, 好きな方ですか, 嫌いな方ですか?	-.08	.84	.05
あなたは, ほかの心理学科のメンバーに, どのくらい親近感を感じますか?	.10	.81	-.01
あなたにとって本当に大切な友人は, 心理学科外, 心理学科内の, どちらに多くいますか?	-.06	.43	-.03
あなたは他の人から, どの程度典型的な心理学科の人とされていると思いますか?	.00	.00	.87
「あなたは典型的な心理学科の人だね」と言われたとしたら, その表現はあたっている, つまり適切にあなたのことを表現していると思いますか? それとも, 外れている, 適切でないと思いますか?	.10	.02	.59

抱く集団同一視にはどのような側面が含まれているかを調べるため、集団同一視尺度の回答結果について因子分析を行った（最尤法，プロマックス回転）。因子負荷量が低かった「あなたは典型的な心理学科の人だね」と言われたら、よい感じがしますか、それとも悪い感じがしますか？”，“あなたの考えや行動に影響を与えた人が、心理学科内にはどれくらいいますか？”，「自分は心理学科の人間なんだなあ」と実感することがありますか？”の3項目を除外した後、残った9項目で再び因子分析を行った（表1）。

因子分析の結果、集団同一視尺度への回答結果からは3つの因子が抽出された。第1因子は、集団に対する直接的な愛着を測る4項目で構成され、これを集団愛着因子と名づけた。第2因子は、所属集団の他の成員に対するコミットメントについて尋ねた質問項目3項目からなる因子で、これを成員愛着因子と名づけた。第3因子は、集団成員としての自己意識に関する質問項目からなる因子で、これを成員性意識因子と名づけた。この第3因子は、Karasawa (1991) が抽出したIDgroup 因子から新たに抽出された因子であった。

集団同一視に対する所属期間の影響

集団への所属期間の長さが集団同一視の高低に影響を与えるかを調べるため、集団同一視の全因子の平均得点と各因子における得点について、学年を要因とする被験者間の1要因分散分析を行った（表2）。同一視の全因子の平均得点に関しては、学年による主効果が見られた（ $F(2, 129) = 5.24$ $p < .01$ ）。Tukey 法による多重比較の結果、2年生の同一視得点が3年生の同一視得点よりも有意に高くなった。集団同一視の各因子においてもそれぞれ分散分析を行ったところ、集団愛着因子において学年による主効果が見られた（ $F(2, 129) = 7.07$ $p < .01$ ）。Tukey 法による多重比較の結果、2年生の同一視得点は3年生の同一視得点より

有意に高く、また1年生の同一視得点よりも高くなる傾向にあった。成員愛着因子と成員性意識因子においては、学年間では同一視には差は見られなかった（ $F(2, 129) = 1.69$ n.s.），（ $F(2, 129) = 1.15$ n.s.）。これらの結果から、所属期間は集団同一視の中の集団そのものへの愛着に対して起きているといえる。しかしながらその結果は、集団同一視の得点は2年生においてもっとも高くなり、3年生でもっとも低くなるという、所属期間が長くなるほど高い集団同一視を示すであろうという当初の仮説を支持するものではなかった。

心理学への興味・関心に対する所属期間の影響

調査対象者の心理学という学問そのものに対する興味や関心が、学年が進級していくにつれて変化しているかを測定するため、心理学興味因子に対して学年を要因とする被験者間の1要因分散分析を行った結果、学年による主効果が見られた（ $F(2, 129) = 5.06$ $p < .01$ ）。2年生の心理学の興味に対する得点は3年生より有意に高く、また1年生は3年生よりも高くなる傾向にあった。このことから3年生になると心理学への興味や関心がそれ以前と比べて減退するという結果を得た。この結果もまた、所属期間が長くなると心理学への興味・関心も強くなるという予測とは反対のものであった。単純に長く集団と接することがその集団で行われる活動への興味・関心を強めるわけではないということがわかる。

集団成員イメージの評価に対する所属期間の影響

表3は調査対象者がそれぞれ抱いている心理学科の学生として好ましい成員のイメージと好ましくない成員のイメージについて、21項目の形容詞にどの程度あてはまるかを評価させ、内集団成員への評価得点として測定したものである。

所属期間の長さが成員イメージへの評価に影響を与

表2 集団同一視全体と各因子における平均点と標準偏差。

	1年生	2年生	3年生	F
全因子平均	4.31 (0.80)	4.64 (0.80)	4.03 (0.85)	$F(2, 129)=5.240^{**}$
集団愛着因子	4.41 (1.07)	4.88 (0.86)	3.96 (1.23)	$F(2, 129)=7.069^{**}$
成員愛着因子	4.88 (1.09)	5.15 (1.15)	4.67 (1.19)	$F(2, 129)=1.693$
成員性意識因子	3.65 (1.30)	3.90 (1.25)	3.46 (1.10)	$F(2, 129)=1.147$

**<.01

上段は平均、下段()内は標準偏差

表3 所属集団成員イメージに対する評定値の平均と標準偏差。
×印の項目は逆転項目。

	好ましい成員		好ましくない成員	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
明るい	4.87	(1.39)	3.06	(1.63)
× 閉鎖的な	4.73	(1.50)	3.00	(1.47)
社交的な	4.98	(1.25)	3.08	(1.44)
× 短気な	5.70	(1.13)	3.11	(1.62)
勤勉な	5.84	(0.96)	2.67	(1.59)
素直な	4.81	(1.16)	3.11	(1.52)
思いやりのある	5.35	(1.13)	2.83	(1.49)
× 自己中心的な	4.93	(1.40)	2.80	(1.51)
× 不真面目な	5.55	(1.26)	2.83	(1.74)
温厚な	5.32	(1.05)	2.95	(1.41)
誠実な	5.41	(1.07)	2.90	(1.47)
× 不親切な	5.57	(1.07)	3.20	(1.61)
意欲的な	5.64	(0.94)	2.66	(1.51)
公平な	5.21	(1.13)	3.07	(1.50)
積極的な	5.20	(1.22)	2.90	(1.55)
× 心の狭い	5.71	(1.16)	2.94	(1.67)
正確な	4.86	(1.16)	3.12	(1.41)
優しい	5.35	(1.03)	2.93	(1.44)
× 無責任な	5.71	(1.23)	2.85	(1.78)
× 意志の弱い	5.13	(1.40)	3.24	(1.68)
× 内向的な	4.42	(1.32)	3.43	(1.48)

N=132

表4 各学年の成員イメージへの得点と標準偏差。

	1年生	2年生	3年生	F
好ましい成員評価	5.21 (0.76)	5.42 (0.61)	5.02 (0.70)	F(2, 129)=3.132 *
好ましくない成員評価	2.97 (0.95)	2.99 (1.19)	2.99 (0.74)	F(2, 129)=0.007

* p<.05

上段は平均, 下段()内は標準偏差

えるかを調べるため、心理学科の学生として好ましい成員イメージへの評価得点と好ましくない成員イメージへの評価得点をそれぞれ、学年を要因とする被験者間の1要因分散分析で比較した(表4)。

好ましい成員イメージにおいて、主効果が見られ(F(2, 129) = 3.13 p < .05)、Tukey法による多重比較の結果、好ましい成員イメージへの評価において2年生が3年生よりも有意に高い得点を示していた。好ましくない成員イメージへの評価に関しては学年間で有意な差は見られず、所属期間の長さの影響はみとめられなかった(表4)。成員評価については、所属期間の長さは好ましい成員イメージに対してのみ影響を与えていた。しかしながら好ましい成員イメージの評価への所属期間の影響も集団同一視に対する場合や心理学への興味・関心に対する場合と同じく、2年生は

心理学科の好ましい成員イメージに対して3年生よりも高い評価を下しているという結果が得られた。

集団同一視および心理学興味因子と成員イメージとの相関

集団同一視および心理学興味因子と成員イメージ評価との間に関連があるかを検証するために、集団同一視尺度の各因子得点と成員イメージの評価得点の相関を求めた(表5)。

その結果、集団同一視の各因子と好ましい成員イメージ評価との相関係数を求めたところ、集団愛着因子(r = .20, p < .05)と成員性意識因子(r = .24, p < .01)の2つの因子において好ましい成員イメージ評価との間にそれぞれ有意な相関が見られた。つまり集団同一視の集団そのものに対する愛着や、自らをより

表5 集団同一視および心理学興味因子と成員イメージとの相関

	集団愛着因子	成員愛着因子	自己意識因子	心理学興味因子	好ましい成員イメージ評価	好ましくない成員イメージ評価
集団愛着因子	1	0.368 **	0.384 **	0.500 **	0.203 *	-0.117
成員愛着因子	0.368 **	1	0.109	0.328 **	0.060	0.103
自己意識因子	0.384 **	0.109	1	0.318 **	0.243 **	-0.116
心理学興味因子	0.500 **	0.328 **	0.318 **	1	0.109	-0.054
好ましい成員イメージ評価	0.203 *	0.060	0.243 **	0.109	1	-0.333 **
好ましくない成員イメージ評価	-0.117	0.103	-0.116	-0.054	-0.333 **	1

* p<.05 ** p<.01

強く心理学科の一員として自覚している度合いが高まるほど、その成員の好ましい成員イメージへの評価が高まると考えられる。一方、好ましくない成員イメージは集団同一視との相関が見られなかった。

心理学興味因子は心理学科への集団同一視の全て因子に対して有意な正の相関が見られた。心理学という学問に対する興味が、心理学科の同一視に関連しているこの結果は同一視を構成する質問内容からも妥当だと考えられる。しかし心理学興味因子と好ましい、あるいは好ましくない成員イメージ評価との間には、有意な相関をみとめられなかった。

考 察

質問紙1における集団同一視尺度の因子分析から、Karasawa (1991) が明らかにした IDgroup と IDmember の2因子だけでなく、成員個人の意識に関する質問項目からなる3番目の因子が抽出された。本研究において新たに抽出された成員性意識因子は Karasawa (1991) の IDgroup に含まれる2つの質問項目から構成されている。これは Karasawa (1991) が集団同一視尺度の作成にあたって、IDgroup の中に想定していながらも明確な分離がなされなかった、所属集団に対する情緒的な愛着 (affective) と所属成員性の認識 (cognitive) に関する2つの要素のうち、cognitive の要素に対応していると考えられる。所属成員性の認識が、調査対象者の所属集団によっては IDgroup 因子の中に含まれるか、あるいは本研究における結果のように個別の因子として意識されるかは、各集団の性質の違いに由来することが考えられる。Karasawa (1991) では調査対象者はコンピュータ専門学校生徒であった。専門学校で行われている活動は、生徒の将来のキャリアに非常に密接に関連しているため、集団の性質と調査対象者の生徒の成員性の認識が近くなり、所属集団に対する情緒的な要素と集団成員性の認識が区別されない結果となったと思われる。一方で本研究の調査対象者である心理学科の学生は、集団で行っている活動が各対象者のその後のキャリア

に直接結びつく意識には乏しいと思われ、そのため所属集団に対する情緒的な愛着と所属成員性とは分離して抽出されたものと思われる。

本研究の結果では、当初仮定していたような所属期間が長くなるにつれて同一視や心理学への興味、成員イメージ評価が高まるという明確な結果は見られなかった。集団愛着因子において3年生になると同一視が低下していることから集団そのものに対する感情的な愛着感や心理学に対する興味、好ましい成員イメージは、3年生に学年がすすむことで低下していることから、3年生に進級することでもたらされる変化が集団成員の意識に強い影響を与えている可能性がある。考えられる変化としては、本研究の調査対象者である心理学科の学生は、3年生になると全員がゼミという少人数の集団に属し、心理学科とゼミという心理学を学ぶ二種類の集団に同時に所属することとなる。どちらの集団も心理学を学ぶという目的については共通しており、3年生が抱く集団成員性の性質は双方の集団で共通している。Karasawa (1988) の研究においては成員性が高い集団は凝集性が高いという結果が得られている。ゼミは学科と同じく心理学を学ぶにしても、学ぶ内容がより専門的になり、卒業論文の製作という大学生活の総決算にかかわる活動を行うため、各成員の活動内容や活動目的がより明確かつ具体的になる。自己カテゴリー理論 (Turner et al, 1987) によると、集団の性質が成員にとって関係が深い状態にあったり、成員性が用いられやすい集団により強い社会的アイデンティティを抱くとしている。また Fiske と Taylor (1991) は、集団の性質が顕在化するかどうかはそれが環境の中で、集団の性質が刺激として他の刺激に対して相対的に突出する程度であるとしている。学科とゼミをそれぞれ別の集団とした時、成員性の種類が同じものであるにせよ、ゼミの成員性が学科の成員性よりも強い刺激として意識されることでゼミの成員性の方がより強く顕在化すると考えられる。そのためゼミと学科という同じ成員性を持つ2つの集団の比較したときにより明確に成員性を意識すると思われるゼミへ同一視の

源泉が移ったと考えられる。しかしながら、本研究ではそれぞれの学年ごとの調査対象者に対して調査を行っている。すなわち同じ集団を縦断的に調査したのではないため、各学年の成員における性質の差が結果につながった可能性も考えられる。その検証は今後必要となろう。

集団同一視と心理学への興味や関心との関連については、Hogg (1992) は内集団の成員に対する社会的魅力は非個人化されたものであるため否定的なものではありえないとしている。社会的アイデンティティに基づいて内集団成員のイメージを評価することは、その成員の一員である自己評価も高めることも含んでいるため、基本的に集団成員イメージの好ましい部分を想起するはずである。さらに本研究はTajfel & Turner (1979) をはじめとする内集団と外集団とを比較した実験のように、外集団との葛藤もなければ、Karasawa (1988) のように外部からの所属集団の評価への脅威もない。そのため内集団ひいき (Tajfel et al, 1971) や、黒い羊効果 (Marques et al, 1988) のように、成員評価を高めたり、貶めたりして所属集団の価値を守る必要がないために、集団同一視と好ましくない成員イメージとの関連が見られないものと推測できる。社会的アイデンティティの重要な構成要素のひとつが自己高揚動機であること (Hogg, 1992) から、同一視の上昇には集団に対する価値的な側面を含む感情的コミットメントが関わっていると考えられる。

成員愛着因子は成員イメージ評価との間に相関を見出すことができなかった。成員が所属集団において成員性を獲得する心理過程に着目した自己カテゴリー理論 (Turner et al, 1987) によると、各成員は所属する集団を最も体現する典型的な成員 (プロトタイプ) の性質に自らを近づけていくとされている。このことから成員イメージ評価とは心理学科のプロトタイプへの評価だと思われる。一方で、集団同一視尺度に含まれる成員愛着因子は周囲にいる実在の他成員へのコミットメントの程度であると考えられる。プロトタイプへの評価はあくまでも成員自身が自己を集団成員へと近づけていくためのプロセスの一つと考えられる。そのため他の内集団成員への評価とは関係がないという結果に繋がったと思われる。

参考文献

- Fiske, S.J., & Taylor, S.E. (1991). *Social cognition*. 2nd ed. New York: McGraw-Hill.
- Hinkle, S., Laurie, A., Taylor, D., Fox-Cardamone, L., & Cook, K.F. (1989). Intragroup identification and intergroup differentiation: A multi-component approach. *British Journal of Social Psychology*, 28, 305-317.
- Hogg, M.A. (1992). *The Social Psychology of Group Cohesiveness-From Attraction to Social Identity-*, London, Harvester Wheatsheaf.
(ホッグ M.A. 廣田君美 藤澤等 (監訳) (1994). 集団凝集性の社会心理学 北大路書房)
- Karasawa, M. (1988). Effects of cohesiveness and inferiority upon ingroup favoritism. *Japanese Psychological Research*, 30, 49-59.
- Karasawa, M. (1991). Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, 30, 293-307.
- Marques, J.M., Yzerbyt, V.Y., & Leyens, J.P. (1988). "The Black Sheep Effect": Extremity of judgements towards in-group members as a function of group identification. *European Journal of Social Psychology*, 18, 1-16.
- 大石千歳・吉田富二雄 (2001). 内外集団の比較の文脈が黒い羊効果に及ぼす影響 - 社会的アイデンティティ理論の観点から - 心理学研究, 71, 445-453.
- 大石千歳・吉田富二雄 (2002). 黒い羊効果と内集団ひいき - 社会的アイデンティティ理論の観点から - 心理学研究, 73, 405-411.
- Tajfel, H., Billig, M.G., Bundy, R.P., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, 1, 149-178.
- Tajfel, H., & Turner, J.C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In W.G. Austin and S. Worchel (Eds), *The Social Psychology of Intergroup Relations* (pp.33-47), Monterey, CA: Books-Cole.
- 垂澤由美子・広瀬幸雄 (2006). 集団成員の流動性が劣位集団における内集団共同行為と成員のアイデンティティに及ぼす影響 社会心理学研究, 22, 12-18.
- Turner, J.C., Hogg, M.A., Oaks, P.J., Richer, S.D., & Wetherell, M.S. (1987). Rediscovering the social group. *Rediscovering the social*

group: *A Self-Categorization Theory*. Oxford:
Basil Blackwell. Pp.153-185.

(蘭 千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美 (訳)
(1995). 社会集団の再発見 - 自己カテゴリー化理論 -

誠信書房)

Zajonc, R.B. (1968). Attitudinal effects of mere
exposure. *Journal of Personality and Social
Psychology (Monograph Suppl., Pt. 2)*, 1-29.

Influences of the length of belonging to group on group identification and on evaluation of member's image

DAISUKE AKASU (*Graduate school of Psychology, Kurume University*)

TSUNEO KITO (*Department of Psychology, Kurume University*)

Abstract

We investigated the influence of the term of enrollment on the strength of group identification and on the evaluation of personal images of superior and inferior group member. 132 undergraduate students from department of psychology (56 of first graders, 49 of second graders and 27 of third graders) answered Karasawa's group identification scale (1991) and evaluated personal images as superior and inferior group members. By using factor analysis, three factors, affection to in-group itself, affection to group members, and cognition as a member of in-group were differentiated in the identification scale. At the factor of affection to in-group itself, identification scores of second grade students were higher than ones of other grade students. In case of evaluations to personal images as positive group members, second graders highly evaluated than third graders did. Correlations between the two factors in group identification scale, affection to in-group itself and cognition as a member of in-group, and evaluations of personal images as superior group members were also significant.

Key words: group identification, evaluation of member's images, length of belonging